九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

定期市の開設にともなうマジャンギルの生業変化と現金経済への適応 ： 世帯経済・家畜飼養・土器製作

佐藤, 廉也
九州大学大学院比較社会文化学府基礎構造講座

https://doi.org/10.15017/17114

出版情報：比較社会文化. 16, pp.87-101, 2010-03-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第16巻（2010）87～101頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.16（2010），pp.87～101

論 文

定期市の開設にともなうマジャンギルの生業変化と現金経済への適応

― 世帯経済・家畜飼養・土器製作 ―

Change of subsistence and adaptation to cash economy accompanying emergence of periodic markets among the Majangir: Household economy, livestock and earthenware making

佐 藤 廉 也
Ren'ya SATO

2009年11月7日受付，2009年12月17日受理

要 旨

現金経済の本質とその導入時における人間行動の変化を考察するために，短期間に自給経済から現金経済へと急激に変化したエチオピア西南部の小規模社会（マジャンギル社会）を事例として取り上げ，現金経済への適応の様態を具体的に記述する．森林内で焼畑，蜂蜜採集，狩猟などの自給的な生業をおこなってきたマジャンギル社会は，1980年代の定住化をへてエチオピア国家の傘下に入ったが，20世紀末に定住村内に定期市が開設されると，急速に日常生活に現金経済が浸透した．本稿では特に，世帯経済の現況を具体的に提示するとともに，現金経済の浸透による変化を代表する現象としてウシ・ヒツジ飼養と土器製作をめぐる変化に着目した．現金経済への適応は1950年代以降に生まれた世代において顕著にみられる一方，それより上の世代では相対的に浸透度は緩慢である．このことは1970年代前後にキリスト教を受容した世代が，伝統的生活習慣を守る高齢世代より円滑に現金経済に適応したことを示唆する．

キーワード：現金経済，自給経済，家畜，土器，定住化，エチオピア

1 はじめに

本稿の目的は，短期間に自給経済から現金経済へと急激に変化したエチオピア西南部の小規模社会を事例として取り上げ，現金経済への適応の様態を具体的に記述することによって，人間にとって現金経済とは何か，自給経済から現金経済への移行に際して人々の行動はどのように変化するのかを考察することにある．

エチオピアは，イタリアによる約5年間の占領期をのぞいて，ヨーロッパによる植民地化をまぬかれ独立を保った国である．国内に言語の異なる80以上の民族をかかえるエチオピア国家は，19世紀から1970年代前半まで続く帝政期を通じて，国家の辺境である西南部の低地に住む多くの少数民族を完全に統治することなく，間接的な影響を与えつつも事実上放置してきた．本稿の対象となる民族マジャンギルはその典型で，西南部の低地に分布する森林の中にわずか2世帯から十数世帯程度の小さな集落を形成しつつ，焼畑，採集，狩猟などの生業をおこなってきた（Stauder 1971；佐藤2003；2005）．

エチオピアの社会主義革命によって1974年に帝政は終焉を迎え，1970年代末になると社会主義政権による定住化政策が西南部にもおよび，マジャンギルの移住性の高い伝統的な集落パターンと生活は大きく変わったが，その後も焼畑を中心とする自給経済は基本的に存続し，村内で現金がやりとりされることはほとんどなかった．それが急激に変化したのは次章以下で述べるように，定住村に定期市が開

＊九州大学大学院比較社会研究院環境変動部門基層構造講座
＊Department of Environmental Change, School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

設された20世紀末の頃からである．比較的近年まで自給経済を基本としながら，短期間のうちに現金経済への適応をとげたマジャンギルの経済行動の変化を検討することによって，現金経済，ひいては貨幣とは何か，人間にとって貨幣はどれほどの普遍性を持つものであるかを考察する材料になり得るだろう．

人間の経済行動の普遍性を実験経済学の立場から検証する道具のひとつに，「最終提案ゲーム」[i]がある．先進諸国の様々な属性をもつ人々のあいだでこの実験が繰り返された．そのほとんどの結果は類似したもの，すなわち，提案者による分配案はほとんどの場合自らが50～80%をとるというものであり，70%以上の提案に対しては応答者によって拒否される確率が高まるというものであった．これらの結果は，人間の「公正への選好」の普遍性を示すものとして理解されてきた．

ところが，ヘンリッチらの人類学者グループが，南米，アフリカ，ニューギニアなどにまたがる複数の小規模社会において同様のゲームを実施したところ，先進諸国とは大きく異なる結果が得られ，これらは標準的な経済学の仮定する「経済人」とも，また行動経済学者が予想する「公正への選好」をとる人間性とも異なるものだった(Henrich et al. 2004)．興味深いのは，これらの結果の分析において，ヘンリッチらは「現金経済が浸透している社会ほど，最終提案ゲームにおける提案額（自らの取り分）が少なくなる（つまり，公正性，平等性の志向がより強い）」という相関を見いだしていることである．

これらの結果にはいくつかの解釈が可能であると思われる．ひとつは，現金経済の浸透によって人々は公正を選好するようになるというもので，もうひとつは，もともと公正への選好をもつ人々が現金経済を受容しやすいというものである．さらに，現金を分配するというゲームのルールがそもそも現金経済のルールを認知することを必要とするのだ，という解釈も可能かもしれない．いずれにせよ，自給経済から現金経済へと移行する局面を観察することによって，人間の経済行動の普遍性と多様性を検討するのに役立つはずである．

本稿では，次章においてマジャンギルの20世紀後半以降の社会変容と定住化の歴史について簡潔に述べた後で，第3章で1999年に定住村内に開設された定期市について記述し，続いて第4章では定期市開設後のマジャンギル世帯経済について検討する．そして続く章で，定期市開設後のマジャンギルの経済行動の変化を象徴するものとして，とくに家畜飼養の開始と土器製作・売買をとりあげ，その現状を記述する．本稿で提示されるデータは1992年以降にクミ村を中心に筆者によっておこなわれた現地調査にもとづくものであるが，多くは2009年8月から9月にかけておこなった調査によっている．

2 マジャンギルと20世紀後半以降の社会経済変容

マジャンギルは，エチオピア西南部（ガンベラ州，オロミア州，南部諸民族州）の森林地域をもっぱら居住地として選び，焼畑と，蜂蜜をはじめとする森林産物の採集，狩猟などを生業としてきた，推定人口3～4万人のナイルサハラ語系の集団である（図1，写真1・2）．森林内では伝統的に，世帯数わずか数戸の小集落を形成し，数年から数十年ごとに集落を移動しつつ暮らしてきた．20世紀前半期以前から，森で採集した蜂蜜を始め，象牙や野生のコーヒーなどの交易を通じて外部集団とのかかわりを保ってきたが，1960年代頃までは中央政府との直接的な接触は希薄で，政府はたびたび徴税の試みをおこなったが成功せず，相対的な政治的自律性を保っていた．第二次大戦の前後ま

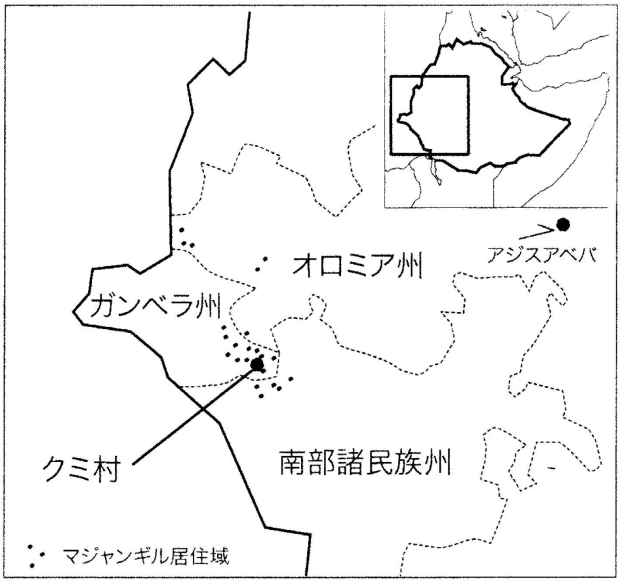

図1 調査地域の位置

写真1 マジャンギルの集落景観（手前は焼畑、背後には成熟林が広がる）

写真2　マジャンギルの焼畑

では奴隷交易も残存しており，マジャンギルは奴隷狩りの対象となっていた．エチオピア高地人はマジャンギルをつかまえてエチオピア各地にあった奴隷市場で売り，またそれが不可能な時はその場で殺害することも珍しくなかったため，エチオピア高地人とマジャンギルのまともな接触は生まれにくかった（佐藤 2005）．

1960年代半ばになると,長老教会系の福音主義キリスト教ミッションによるマジャンギルへの布教活動が始まった．それまでスーダンで布教活動をしていたアメリカ人ミッションがマジャンギルの森の奥深く（今日のゴダレ Godare 村，位置については図3参照）を伐開して飛行場をつくり，そこを拠点として学校と診療所を開設して11年あまりの間活動をおこなった．

1974年に社会主義革命が起こり，皇帝は廃位され軍事社会主義政権が誕生した．この政権は1970年代後半から国内の辺境部で定住村化（villagization）政策を実施し，それまで辺境部で国家から自律的に生活していた少数民族を傘下に組み込むことを企てた．この政策は多くの場所では成功しなかったとされるが，マジャンギルはこれを積極的に受け入れ，その結果森の中にいくつもの定住村がつくられ，若い世代を中心に人口が集まった．この定住化政策をリードしたのは，過去にキリスト教ミッションの影響を受けた世代のマジャンギルたちであった．政府は定住化に際して山刀や洋服を安価で配布するなどの策をとり，それらが誘因となった面もあるが，マジャンギルの若者たちは自ら，村の中心に教会をつくり，定住化と併行してキリスト教の普及に努めた．社会主義政権は外国人による布教活動を禁じたため，ミッションは既になくなっていたが，ミッションの影響を受けた若いマジャンギルたちが自発的に普及活動をおこなったのである（Sato 2002）．

1991年には社会主義政権が倒れ，民族を代表とする地方自治を謳う新政権が誕生した．各地の民族を構成要素とする州自治の理想はかえってその権利をめぐる民族間の争いを助長させる側面もあったものの，政権は1990年代半ば以降相対的に安定し，本稿の主な調査地であるクミ村にも，1995年には小学校が開校し，ほぼ同じ時期に公立の診療所が建設され高地人の診療士が常駐するようになった．政権が安定するとエチオピアの辺境部の町にも靴やラジオ，洋服などの工業製品が増え，マジャンギルもそれらの消費財を求めるようになっていき，町の高地人との交渉機会も徐々に増えていった．また，1999年には，高地系移民がクミ村に入植を始めた（2009年現在，村人の1割強は高地系移民で占められている）．村の人口増加はすすみ，焼畑伐採地を含む村の範域は急速に拡大し，定住化前とは一変している（図2 a,b）．そうしたなかで，村のなかにも定期市が開設された.次章ではこの定期市について述べる．

3　定住村における定期市の開設

クミ村における定期市は，高地系移民の入植があった1999年に，ゴダレ地区行政府の提案に基づいて初めて開設された．開設場所は，村内の高地系移民の住居が建てられた地区とマジャンギルの住居が列村状に並ぶ地区の交点にあたる場所で，村の中心に近いT字路の広場である（図

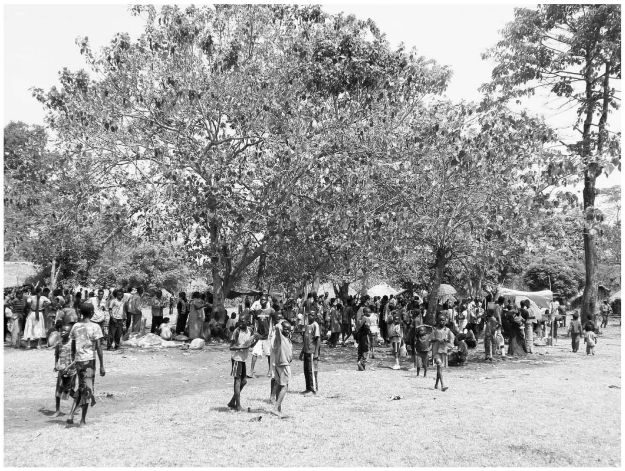

写真3　クミ村の定期市

写真4　定期市で土器やキダチトウガラシを売る村の女性

2）．マジャンギルの村落における定期市の開設はクミ村が最初期であったが，その後マジャンギルのいくつかの定住村で定期市が開かれ現在に至っている（図3，写真3・4）．一方，クミの南方に位置するアシャニ村，ゴンチ村，またクミの北西に位置するパジャジ村など，開設したが人が集まらずに廃止になった事例もある．定期市が現在まで残っているのはゲレシェ村など，地区行政府のある町メティに近接する村のほか，ゴダレ村やクミ村などマジャンギル定住村のなかで人口が多く学校，診療所などの中心的な機能を持つ村である．

定期市で店を構えるのは村に住むマジャンギルと高地系移民で，購買者は村人のほか，差額による利益を得るために町からキダチトウガラシや蜂蜜，ニワトリなどを買い付けに来る小規模な高地系商人である．境界線はないが，マジャンギルと高地系移民の店舗開設場所は大きく市場の東と西で分かれており，表1・表2からわかるように，取り扱う商品も異なる．

表1　マジャンギルが村の定期市で販売する物品・サービス

	標準的な販売価格（ETB）	販売単位	販売者
トウモロコシ	1	1カップ（約500cc）	女性
キダチトウガラシ	6	1カップ（約500cc）	女性
カボチャ	1.5～3	1個	女性
サツマイモ	1	1山	女性
パイナップル	2	1個	女性
アボガド	0.5～1	1個	女性
コーヒーの葉	1	1束	女性
シロ（豆類の粉）	1	1カップ（約100cc）	女性
塩	1	1カップ（約100cc）	女性
インジェラ	1	1枚	女性
卵	0.5	1個	女性
ニワトリ	40～50	1羽	女性・男性
ジュース	0.5	1杯	少年
蜂蜜	12～13	1kg	男性
土器	1～20	1個	女性
散髪	2	1人	男性
靴磨き	0.5		少年
靴修理	3		少年
食事	4	インジェラ・豆のワット	女性

ETB＝エチオピアブル（2009年8月時点で1ブル≒7.5円）
出典：2009年9月の現地調査で観察されたもの

表2　高地系移民が村の定期市で販売する物品・サービス

	標準的な販売価格（ETB）	販売単位
蒸留酒	1	1カップ（100cc）
塩	1	1カップ（100cc）
トウガラシ	6	1カップ（500cc）
モロコシ	3	1カップ（500cc）
タマネギ	2	1山
ニンニク	1	1山
ジャガイモ	2	1山
食用油	25	1リットル
タバコ	1	1枚
シロ（豆類の粉）	1	1カップ（100cc）
ミトミッタ	2	1カップ（100cc）
アビシニアキャベツ	1	1束
石けん	3.5～5.5	1個
単1電池	6	2個
単3電池	10	4個
ビスケット	1	1箱
懐中電灯	18～20	1個
ガム	1	1枚
ペットボトル（空容器）	2	1本（1.5リットル）
タジ（製粉用ざる）	10	1個
ビニル袋	0.5	1枚
マッチ	0.5	1箱
アルミ鍋	10～40	1個
プラスチック製食器	4	1個
靴・サンダル	15～25	1足
洋服	10～250	1着
槍先	10	1本
山刀	50～90	1本
斧	90	1本

出典：2009年9月の現地調査で観察されたもの

マジャンギルの商品は蜂蜜やニワトリのほか，焼畑二次林で採集され乾燥させたキダチトウガラシや，トウモロコシ，サツマイモ，カボチャ，卵などの農畜産品，自作の土器などで，ほとんどは自家生産・採集されたものであるが，一方で靴磨きやジュース（粉ジュースを水に溶かして瓶に詰め販売するもの）など，親や親戚が少年に道具を貸し与えてさせる商売も現在ではおこなわれている（写真5）．季節によっては，収穫されたコーヒー豆も取引される．ウシやヒツジなどの大型家畜については，市場の規模が小さいため村の定期市で取引されることは通常なく，こ

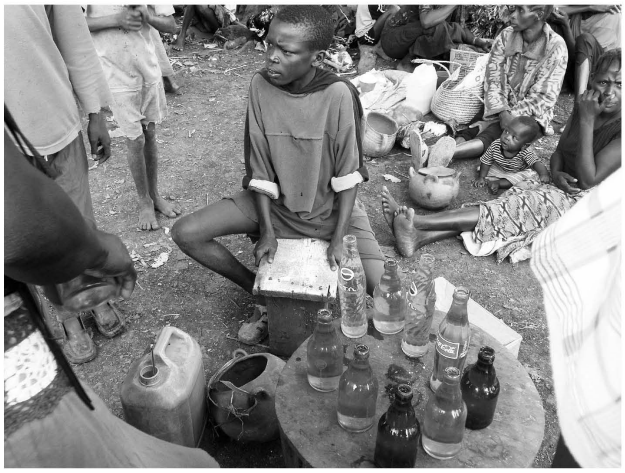

写真5　ジュースを売るマジャンギルの少年

写真6　理髪業を営むマジャンギル

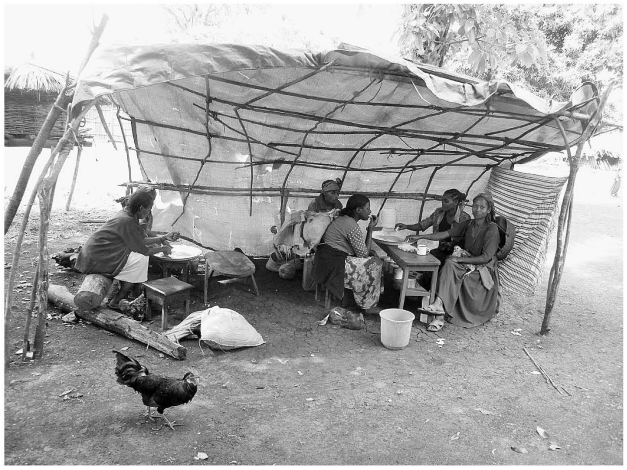

写真7　定期市の近くでマジャンギルの女性が開いている食堂

れらの売買はメティの町の定期市などでおこなわれる．また，理髪を営む男性（写真6）や，女性のなかには，塩や蒸留酒，食用油，調味料などを町で購入して村まで運ぶ商売をする者もここ数年増加している．それらの商品は定期市だけでなく日常生活のなかで隣人たちに販売されている．さらに，定期市開設場所の近くでは食事を提供する女性もあらわれた(写真7)．ここでは彼らが日常的に食しているインジェラ（モロコシやトウモロコシを原料とするクレープ状の発酵パン）とワット（おかずとしてインジェラとともに食されるシチュー）を提供し，他村から来たマジャンギルや高地人を相手に商売をしている．また，一方高地系移民の場合は，ニンニクやタマネギなどの農産物を女性が販売する一方，男性は靴，洋服，日用雑貨など町で入手可能な工業製品を売るための店を構える．

著者はクミ村に定期市が開設されて間もない2000年2月に初めて市の観察をおこなったが，当時のマジャンギル，とくに年配の女性たちは市場における取引きに不慣れで，店は出しても売買交渉はなかなか成立しなかった．それまでのマジャンギルと高地人との関係は良好とはいえず，マジャンギルが森から町に出かけていくと，商品として持って行った蜂蜜に高地人が勝手に指を入れて賞味したり，法外な安値で蜂蜜を買おうとするなど，マジャンギルにとって高地人は油断のならない存在であった．初期の市においては自らの商品に対する適正価格も把握していないという事情もあり，高地人が客観的に適正といえる値をつけても，かたくなに商品の売却を拒否する女性が多くみられた．そのため当時の市では，村のなかで長老[ii]と位置づけられる数人のマジャンギルが，拡声器を使って市場をまわり，「キダチトウガラシは○円，卵は○円，…」と「適正価格」を周知する行為が観察された．

しかしその後，村内で急速に現金経済が浸透し，マジャンギルの隣人どうしでも日常的な現金のやりとりがおこなわれるようになり，品目ごとの価格変動も各個人が把握するようになったため，現在では定期市においても価格の交渉が比較的円滑におこなわれるようになっている．エチオピアはここ数年のインフレ政策のために物価の上昇と変動がきわめて激しく，例えば2000年当時と比較すると，塩は2.5倍，蜂蜜とキダチトウガラシは3倍，卵は4倍に上昇しているが，定期市に参加する今日のマジャンギルはこれらの変動を比較的正確に把握し，受け入れているようにみえる．これは上に述べたように，定期市の開設後に村内での現金のやりとりが日常的になったことによる．次章では現金にかかわる世帯経済の現状について述べる．

4　定期市開設後の世帯経済

著者が初めてクミ村で調査を開始した1992年当時，村内におけるマジャンギルどうしの現金のやりとりは，教会活動資金を村内で貯蓄するための果物販売や，婚資[iii]のやりとり，不時の出費における貸し借りなど，きわめて限定されたものであった．マジャンギルは1960年代以前から蜂蜜採集活動を現金獲得のための生業としておこなっており，それによって得た現金で山刀や斧を，また定住化後の1980年代以降には時計，靴や塩，電池，石けんなどを購入していたが，それらはメティなどの町で購入するもので，村内でのやりとりは例外的だった．もちろん隣人どうしで塩や石けんなどの日用品を融通したり，食事をふるまったりすることは毎日おこなわれていたが，それらは現金を介さない助け合いの互恵的行為であった．マジャンギルどうしの会話では，森の外に住む高地人や他民族に対して「彼らは友人どうし，親戚どうしですら金のやりとりをする」という揶揄的表現がしばしば登場する．このような状況であったため，著者が村に住み込み調査する際も，見返りに金品を支払うことはなく，寝泊まりするための小屋と毎日の食事は他の旅人と同様に無償で供与されていた．

1995年には村内に移住した高地人によって，初めて小さなスク（雑貨店）が開店し，石けん，塩，食用油や懐中電灯，電池などの日用品が販売されたが，マジャンギルどうしの関係は上記の状況が基本的に存続した．この状況に変化がみられ始めたのは，定期市開設後であったと思われる．定期市での売り買いは，マジャンギルと高地人だけでなくマジャンギルどうしでもおこなわれる．定期市で自家生産の農産物などが現金でやりとりされれば，その延長で日常生活においても現金でやりとりされるようになるのは自然である．後述のように，日常的に購入する食料などの物品が増え，現金を常に必要とするようになったことが隣人どうしでの現金のやりとりに拍車をかけた．

ただし，隣人関係においてそのような物品が全て現金でやりとりされるようになったわけではない．彼らは，現金のやりとりをする「商売関係 *nagade*」に対して，無償で融通しあう「友人関係 *damtan*」を区別し，隣人どうしではしばしば後者の関係を優先する．例えば，2007年３月の調査時に，著者が村の友人のＡ氏宅で食事を待っていた時，調理に不足していた塩を隣の家の女性が持ってきてくれた．Ａ氏はそれに対して１ブルの対価を支払おうとしたが，隣家の女性は少し気分を害した様子で「そんなのいらないよ．これは *damtan* で，*nagade* じゃないんだから！」と言って受け取ろうとしなかった．この例にみられるように，現金をめぐる村内のやりとりは，伝統的な融通行為と

表３　クミ村の世帯における支出項目と支出頻度（Ａ氏世帯の例）

支出項目	マジャン語名称	金　額	平均的支出頻度	備　考
塩＊	mooy	1（100cc）	隔日程度	
食用油	zeiti	1（30ml）	ほぼ毎日	
タマネギ	sunkurti dengong	1（４～５個）	ほぼ毎日	
ニンニク	sunkurti	1（３～４個）	隔日程度	
ウコン	urdi	1（大さじ１）	週３回程度	副食に使われる調味料
ソラマメ	kiki	10（１kg）	週２～３回程度	
レンズマメ	musuri	14（１kg）	月１～２回程度	
マカロニ	mokoroni	13（１kg）	月１～２回程度	
シロ	siro	1（100cc）	週３～４回程度	エンドウマメの粉にスパイスを混ぜた調味料
石けん＊	samune	3.5	週４回程度	
洗濯用石けん＊	samune	5	週２回程度	
化粧水	kepati	6	月１回程度	
単１電池	dingay	7.5（２個）	２ヶ月に１回程度	
単３電池＊	dingay	5（２個）	月２回程度	
懐中電灯＊	bateri	18～20	数ヶ月～１年	２～３年前から中国製 LED が普及
インジェラプレート	d'ein	20	年１回程度	
たらい	poopoo	5	１～２ヶ月毎	
鍋	kebet	60（５点セット）	耐久消費財	
ズボン＊	bontare	90～120	数ヶ月～１年程度	
シャツ＊	abi	20～60	数ヶ月毎	女性用は相対的に高価
スカート＊	guddi	130	１年～数年	数枚所有している
羽織布	serb	50	２～３年毎	２枚程度所有している
下着＊	panti	10～20	数ヶ月毎	
靴下	sokusi	15	年に２～３足	
靴	saame	15～200	数ヶ月～２・３年	女性が普段履くものは安く、長持ちしない
タオルケット	bederesi	100	数年毎	
むしろ	andagi	15～90	１～数年毎	樹木の繊維で編んだものと工業製品の２タイプ
チガヤ（屋根材）＊	elt	80～100（１軒相当分）	数年毎	自ら栽培していれば購入不要
茶用ストレイナー	taji	5	数ヶ月～１年毎	マジャンが製作したものを購入
風撰具	pad'e	25	10年程度	マジャンが製作したものを購入
かご（背負い用）＊	kante	30	１～２年毎	マジャンが製作したものを購入
かご（蜂蜜採集用）＊	konge	50	10～20年毎	マジャンが製作したものを購入
ヤスリ	murade	40	数ヶ月～２・３年	
斧＊	kabi	60?90	10～十数年毎	
山刀＊	jame	60～80	年２回程度	
ノミ	gasoy	15～20	耐久消費財	
南京錠	korpi	10	１～２年毎	
時計＊	saiti	6～130	数ヶ月～数年	
焼畑の伐採委託		200～300（１筆分）	年１～２回	シーズン毎の労働力に応じて委託される

＊は1990年代から購入必需品であったもの
出典：2009年の現地調査による

微妙な関係を保っている．

表３に，2009年の時点で妻と三人の子供をもつ47歳のＡ氏が現金で購入している物品，および支出の頻度を示した．これらは全て村内で調達されるわけではなく，洋服や靴，斧，山刀，時計など高価なものはメティなどで購入する．1990年代前半までは，日常的に購入されていたものは塩や石けんに限られていたが，現在では食料品に限ってみても，食用油や調味料，タマネギ，ニンニク，ソラマメなど毎週必ず購入されるものがみられる．これには，村内でこれらの食料品にアクセス可能となったことによって食生活が変化したことが背景にある．1990年代までのマジャンギルの日常の食事は，タロイモ，ヤムイモ，サツマイモ，キウ(トウモロコシの練り粥)，インジェラなど，季節ごとの収穫物を主食とし，野草やカボチャの葉，狩猟によって得た野生動物の肉などを塩で煮込んだものを副食として食べるのが標準的で，塩以外は基本的に農耕・狩猟・採集によって自家調達される素材によっていた．現在でもそれらは基本メニューであるが，インジェラに豆やマカロニなどを煮込んだシチューをかけて食べる高地人風の食事の登場頻度が増加した．このシチューには，シロ（エンドウマメの粉に数種のスパイスを混ぜたソース原料）やタマネギ，ニンニク，ウコン，食用油などの購入食料品が使用される．彼らは，それを塩100cc，食用油30mlというように，調理１，２回に必要な分だけ購入する．購入先は高地人の雑貨店や商売を始めたマジャンギル女性などで，世帯・個人ごとに得意先関係がつくられている．

日常化した消費をまかなうために，彼らはどのように現金収入を得ているのだろうか．現金獲得のための活動は男女で異なるが，まず男性については，表４にＡ氏の例を示した．標準的な成人男性の現金獲得手段は，蜂蜜とコーヒー豆の売却で，表４のうちトウモロコシとニワトリの売却は，男女ともに必要に応じておこなう手段である．一部のマジャンギルは近年ウシ・ヒツジ飼養を始め，肥育した家畜の売却によって現金を得ているが，Ａ氏の場合は現在のところウシやヒツジを所有していない．家畜飼養については次章に詳しく述べることとする．

表４　男性の主な収入（Ａ氏の例）

収入項目	期　　間	収入額（ETB）
蜂蜜採集	2009年雨季	640
	2009年乾季	3000
	2008年雨季	500
コーヒー	2008年	1500
	2007年	1000
トウモロコシ	2008年	130
ニワトリ	2008年７月～2009年８月	40
	2007年７月～2008年８月	200

出典：2009年の現地調査による

これらの活動のうち，蜂蜜採集はマジャンギルの伝統的な現金獲得手段であり，近年ますます重要性が高まっている．多くのマジャンギルは森とサバンナの複数箇所に採集テリトリーをもっており，季節によって異なる場所で蜂蜜を採集する．メインの収穫シーズンは12月～２月の乾季に森の中で得られるもので，この時には頻繁に採集に出かけ，数百キロの蜂蜜を得て市で売却し，個人によって，また年によって収穫量は異なるものの，しばしば数千ブルの収入を得ることが可能である．また雨季のはじめにあたる４月から５月にかけての時期はサバンナの収穫期にあたり，泊まりがけの採集旅行に出かけ収穫を得る．Ａ氏の場合，2009年８月現在47の巣箱を仕掛けており，収入額は表４の通りであるが，Ａ氏の友人のように80を超える巣箱を複数の採集テリトリーに持つ男性もおり，収入額にも個人差がある．

一方，もうひとつの男性の現金獲得手段であるコーヒー栽培は，1990年代後半から村人のあいだに広まった．コーヒー栽培普及のきっかけとなったのは，1995年から政府による村人に対するコーヒー栽培の奨励プロジェクトが始まったことで，この時から数度にわたって，栽培希望者に苗木が無償で供給された．マジャンギルはかつてから，森のなかに自生するコーヒーを採集して町の定期市で売るなどの活動をおこなっていたが，コーヒーの葉を煮出して日常的に飲む習慣を持っており，当時はむしろ自家消費として採集されていた．コーヒーの大規模な生産が可能になったのは，定住化したことによるものである．Ａ氏の場合，これまでに合計約3000本のコーヒー苗を村周辺の二次林や成熟林内に植え，毎年９月～12月に豆を収穫し，高地人のトレーダーに売却している．このような，主として蜂蜜採集とコーヒーによる，年間3000～6000ブル程度の収入が働き盛りのマジャンギル成人男性の標準的な収入額であるとみてとれる．

女性の場合，蜂蜜やコーヒーのように多額の現金を得る手段はなく，多くは自家製の農作物を定期市で売ったり，キダチトウガラシの採集，雑穀酒の醸造などで少額の現金を得ている(表５)．また，農作物の収穫期には他人のコーヒー豆やトウモロコシなどの収穫と運搬を請け負い，賃金を得ることもここ数年は珍しくなくなった．クミに住むマジャンギル女性の一部には，数年前から蒸留酒や塩，食用油などをメティの市で入手し，それを村に運んで村人に売り，差益を得る商売を営む者も出てきた．また，何人かの女性は前章で述べたように，定期市の周辺で食堂を営んでいる．現金経済への適応を示す象徴的な現象に土器製作・販売をめぐる近年の変化があるが，これについては第６章で述べる．男性，女性がそれぞれ得た現金収入は，夫婦で管理するよりはそれぞれが管理し，必要に応じて一方に渡

されることが多いようである．

表5　女性の主要な現金獲得手段

収入項目		収入額 (ETB)	単位
収穫・運搬手伝い		20〜30	10往復あたり
商品販売	蒸留酒	1	1杯（100cc）
	塩	1	1カップ（100cc）
	食用油	1	1カップ（30cc）
農畜産物販売	雑穀種	2	1杯（約800cc）
	カボチャ	2〜4	1個
	サツマイモ	2〜3	1山
	ヤウティア	2〜3	1山
	ヤムイモ	2〜6	1個
	ダイジョ	2〜5	1個
	タロイモ	2〜4	1山
	カボチャの葉	1〜2	1束
	アビシニアキャベツ	1〜2	1束
	ニンニク	1	1山
	タマネギ	1	1山
	バナナ	0.2〜0.25	1本
	ミカン	0.25	1個
	マンゴー	0.25	1個
	アボガド	0.5	1個
	サトウキビ	0.5〜1	1本
	パイナップル	1.5〜2.5	1個
	ニワトリ	25〜60	1羽
土器製作販売		0.5〜40	1個
キダチトウガラシ採集販売		5〜10	1カップ（500cc）

出典：2009年の現地調査による

5　ウシ・ヒツジ飼養の開始

東アフリカの低地に住む民族の多くは家畜，とりわけウシの飼養に高い価値をおき，財産としてだけでなく様々な文化的側面においてウシに強い執着を示す（Herskovits 1926）．そのなかにあって，マジャンギルは伝統的にウシやヒツジの牧畜をきわめてまれな例外を除いておこなわず，家畜としてはわずかにニワトリと狩猟用のイヌを飼うのみであった．これは，マジャンギルがもっぱら森に住み，森の資源を利用する人々であったことと関連している．森林域にはトリパノソーマ症を媒介するツエツエバエの生息地が広範に存在することがその理由のひとつであった．しかし，1990年代中期以降，定住村に人口が集中して村落域の開拓と拡大がすすむと，村のマジャンギルにもウシやヒツジを所有する人々が現れるようになった．

定期市が開設された1999年の時点では，クミ村でウシを所有するマジャンギルは2，3名程度であった．2000年以降には徐々に増え，現在は表6にみるように，26世帯がウシを，21世帯がヒツジを所有している．このうちウシ，ヒツジの双方を所有しているのは5世帯で，37世帯がウシまたはヒツジを所有していることになる[iv]．人口が急増した現在のクミ村のマジャンギル世帯総数を把握していないが，少なく見積もって300世帯としても，1割程度の世帯がウシまたはヒツジを所有しているにすぎず，また所有世帯の平均所有頭数もウシ・ヒツジともに3頭にも満たない．しかしながら，現在のところウシ・ヒツジをもたないマジャンギルの多くも機会があれば所有したいと考えており，今後家畜数は増え続けることが予想される．

表6　ウシ・ヒツジ所有頭数の度数分布

所有頭数	世帯数（ウシ）	世帯数（ヒツジ）
1	10	2
2	5	7
3	8	5
4	1	2
5	1	4
6	1	0

平均所有頭数（非所有世帯は除外）：ウシ2.3頭，ヒツジ2.9頭
出典：2009年の現地調査による

高地系移民の多くは移住した当初からウシ・ヒツジを所有しており，村内の自分の畑ではウシを使った犂耕作をし，雌牛からは乳を搾って利用していた．マジャンギルは歴史的・言語系統的に低地のスルマ系牧畜民との関係が深いが，近年の家畜飼養に関してはスルマ系低地居住民ではなく定期市などを介して関係を深めつつある高地系エチオピア人の影響によるものである．ただ，マジャンギルは高地人と異なり，農耕にウシを利用することは現在でも全くなく，現在では乳を利用するマジャンギルも一部のみである（マジャンギルはこの理由について，「絞り方は知っているが，自分のウシは気性が荒いので搾るのが難しい」という）．マジャンギルがウシやヒツジを飼う目的は，ある村人が「もしもの時や大きな出費が必要な時に売却するため」と述べるように，万一の時の保険，貯蓄に近いものである．メティなどの定期市で300〜600ブルの子牛を購入して肥育し，子牛を産ませて増やし，売却する場合にはメティの定期市で1500〜2200ブルで売った例が各世帯の聞き取りによって確認された．一方，肥育されたヒツジは1頭あたり150〜350ブルで売れる．

2009年の調査において，いくつかの世帯でウシ，ヒツジの放牧パターンを観察した．ほとんどの場合，1日あたり2回程度の放牧をおこなうが，移動範囲は狭く，自らの焼畑休閑林に連れて行き，そこでロープにつないで2〜3時

写真８　焼畑休閑林におけるウシの放牧

写真９　ウシの頭部に装着されたGPSデータロガー

間程度放置するものであった(写真８)．世帯の構成によるが，放牧は10才前後の少年が担当することが多く，適齢の子供がいない場合には夫または妻が連れて行く．放牧パターンを正確に把握するため，ウシ，ヒツジにGPSを装着して１日の放牧軌跡を記録した[v]（図４・図５・写真９）．マジャンギルと高地系移民とで放牧パターンがいかに異なるのかをみるために，高地系移民のウシの軌跡(図４ c)も記録して比較したところ，明瞭な違いがあることがわかった．マジャンギルの場合，放牧範囲は自宅からほぼ半径１km以内に限られているのに対して，高地系移民の場合は半径２km程度にまで広がっている．これは，マジャンギルが自宅に近接した焼畑二次林を主な放牧地としているのに対して，休閑林をもたない高地系移民の場合は休閑林以外の放牧地を求める必要があるからである．聞き取りによれば，高地系移民の場合片道１時間以上離れた村の境界付近にまで放牧させる場合も珍しくないということであった．

図５はウシとヒツジを両方所有する世帯について，ウシ（図５ a）とヒツジ（図５ b）の軌跡を別個にとったものである．ウシとヒツジは別々に放牧されていたが，放牧範囲はいずれも自宅近隣の半径１km以内におさまるもので，大きな違いはみられなかった．

放牧中のウシやヒツジが他人の畑を荒らしたり所有物を損壊したりするトラブルも，現在のところはそれほど深刻ではないものの，たびたび発生している．マジャンギルによると，畑を大規模に荒らされた場合，数百ブルの賠償になることがあり得るという．だだ，ここ最近起こったものだけを聞き取りによって記録したが，畑作物を荒らされたものが２件，家の前で乾燥させていたトウモロコシが食べられたもの，家の庭に並べていた土器が壊されたものが各１件で，賠償額は20～60ブルと比較的軽微なものであった．興味深いのは，この４件の賠償案件の加害者が全て高地系移民で，被害者がマジャンギルであったことである．Ａ氏の説明によれば，マジャンギルどうしの場合軽微なトラブルであれば賠償を請求することもなく，謝ってすませることが多いが，高地系移民が相手であれば容赦なく賠償を請求するという．Ａ氏らは高地人に対して油断してはならないと述べるが，現在のマジャンギルと高地系移民の間の微妙な緊張関係を示す例だといえるだろう．

６　土器製作の変容にみる現金経済の浸透

土器製作をめぐる近年のマジャンギル女性たちの動きは，定期市開設以降の現金経済への適応にかかわる象徴的な現象である．エチオピア西南部の諸社会をみると，高地・低地いずれにおいても土器製作は特定の集団による専業化が広くみられ，多くの場合は王国形成の歴史のなかで周辺化され被差別階層とみなされる人々の女性によるものが多い（Freeman and Pankhurst 2001）．そうしたなかでマジャンギル社会では，土器製作はほとんど全ての世帯で自給的におこなわれ，個人間で得意不得意はあるものの基本的に世帯内で使用される土器は全ての成人女性によって担われてきた．

クミ村の場合，粘土も村の領域内で採取され，手びねりによる成形から焼成までひとりの女性の手によって，多くは家の庭でおこなわれる（写真10･11）．土器製作の技術は母親から娘へと伝えられつつ，施文や新しい型の製作は隣人などを通じて普及することもある．30分足らずの野焼きによる低温焼成のため，耐久時間は短く，ほとんどは１年以内に破損する．したがって，自家用の土器製作は女性たちによって絶え間なくおこなわれる．

３章，４章でみたように，土器は定期市で女性によって販売されており，買い手もほとんどマジャンギルの女性である．したがって，かつてのように世帯内でほとんど自家製の土器が使用される状況は変容し，購入品が使われていることが予測される．これを確かめるために，村内の20人の既婚女性に対して，家内の土器全てを見せてもらい，

各々が購入されたものであるか自作のものであるかを質問した．その結果，20人中７人の女性は自作の土器をひとつも所有しておらず，全て購入したものか隣人から譲り受けたものであることがわかった．それに対して，全ての土器が自作であったのは１人のみで，残りの女性の過半数は，インジェラプレートとディーカップ（コーヒーの葉を煮出して飲むコーヒー茶用のカップ）のみ購入し，あとの調理用や貯蔵用の土器などは自作していた．インジェラプレートは直径50cm前後の薄いフライパンで，主食のインジェラを焼くために使用されるが，特殊な形状のため耐久性の高いものをつくるのには技術が必要である．ティーカップも同様に，口当たりが良いように薄く壊れにくいものをつくる技術が必要で，これらの土器だけを購入しているという女性が多い．全ての土器を購入している女性は相対的に年齢の若い女性が多かった．土器を自作しない理由としては，「もともと苦手だったので定期市で入手できるようになって作らなくなった」というものと，「つくることはできるが，手間を考えると買った方が良い」という二つの答えが得られた．

Ａ氏には2009年８月の時点で17歳になる娘がいるが，彼女は日常の調理などはほぼ成人女性並みに習得している

写真10　クミ村の女性と所有する全ての自作土器

写真11　土器を成形するマジャン女性

一方で，土器をつくる訓練を母親から十分に受けておらず，まだまともにつくることができない．将来にも彼女は土器をつくらないのではないか，とＡ氏は述べた．土器製作は伝統的には結婚可能な年齢になる20歳頃までに習得されるものだったが，Ａ氏の娘も含め，現在十代の少年少女は村の学校に通っていることもあり，従来に比べ習得のスピードは遅くなっているようである．将来的には，土器を作る技術を持たない成人女性が増えることも予想される．

一方で，販売用に土器の生産を盛んにおこなうようになった女性たちも多い．定期市に土器を並べる女性たちを観察すると，40歳以上の比較的年配の女性が多い．彼女らにとって，土器の販売による収入は重要なものとなっており，庭先で時間が許せば販売用の土器を作る姿もよくみられる．現金経済の浸透によって，土器製作がマジャンギル女性の間で分業化する現象は今後も加速するものと予測される．

7　考察

マジャンギルの急速な現金経済への適応は，いかに説明することができるだろうか．現象をみる限り，村に定期市が開設されたことが世帯経済に現金経済を拡大したことは間違いないと思われる．定期市が開設される以前には，1990年代半ばにできた高地系移民の雑貨店を例外として，生活必需品を含む様々な物品を購入し，また自家生産の農産物や採集物などを現金に換えるためには，片道６時間の道を歩いて町へ出かけるよりほかには方法がなかった．以前の現金経済が蜂蜜の売却や必要最低限の生活必需品の購入にとどまっていたのには，現金経済を促進するインフラが存在しなかったという事情があった．しかし，メティの町にでかけても高地人との接触を嫌う村の女性たちを何度も見てきた著者には，これほどの急速な変化は予想をはるかに超えたもので驚くばかりであった．

こうした急速な適応の背景には，定期市が開設される以前から少しずつ進行していた社会変化がある．ひとつの重要な出来事は，第２章に述べたキリスト教の受容であった．1980年代の定住化のプロセスにみるように，キリスト教の受容は定住化の受容を促進する結果にもつながったが，現金経済の受容にも大きく関連しているようにみえる．これは定住化をリードした世代より若いマジャンギルと，それより上の世代のマジャンギルの行動の著しい差異に示されている．定住化を積極的に受容した世代よりも上にあたる，おおむね1940年代以前に生まれたマジャンギルの多くは，それより若いマジャンギルと異なり，キリスト教信仰を共有せず，キリスト教受容に伴って広まった様々

な新しい慣習を受け入れていない．そうした慣習の代表的なものとして飲酒と喫煙にかかわるものがある．キリスト教の普及に際して当時のリーダーたちは飲酒や喫煙を古い悪習としたため，キリスト教に帰依した若い世代のマジャンギルたちは飲酒も喫煙もしない．これに対して高齢世代は現在でもしばしば村内で酒宴を催し，穀芽酒を呑み歌と踊りに興じる．飲酒・喫煙をめぐる行動をみれば，どちらの世代に属するのかを容易に判定することができる．

高齢世代は，経済行動においても若い世代と異なった行動を示す傾向がある．しばしば若い世代に対して「ベギング（物乞い行動）」をするのもそのひとつで，高齢世代に普通に見られるこうした行動はキリスト教を受容した若い世代にはほとんど見られない（これは表層的な意味での「ベギング」であって，若い世代が他人にものをねだる行為がないというわけではない）．また，現金の消費においても，第4章でみたような若い世代の世帯経済のような著しい変容を示してはいない．このように，二つの世代にはあらゆる面で対照的な行動が認められ，同じマジャンギルの社会のなかに二つの文化があるといっても間違いではないかもしれないと著者は考える．

著者は2008年3月に調査をおこなったとき，試験的に「最終提案ゲーム」をおこなった．詳細については別稿で論じる[vi]が，この結果は，上記の二つの世代の経済行動の差異に関する興味深い示唆を含むものであった．それは，提案者側の提示した額は世代にかかわらず自らの取り分を50～75％を提示するものがほとんどだったが，応答者側の反応は二つの世代ではっきりと分かれたというものである．すなわち，若い世代は相手の提示額が30％以下だった場合全員が拒否したのに対して，高齢世代は全員が受け入れたのである．高齢世代の受諾者のなかには，事前のディスカッションで「30％以下だった場合には拒否する」と話していた人も含まれていた．対照的に，若い世代のマジャンギルには，40％の取り分を拒否した人もいた（彼は事前のディスカッションにおいて，「半分ずつ分けるのでなければ拒否する」と発言していた）．冒頭の問いに戻ると，「キリスト教を受容した世代」は現金経済を円滑に受容し，より強く「公正への選好」を示し，一方「キリスト教を受容しなかった高齢世代」は現金経済にも今のところは反応が鈍く，「公正への選好」に対しても標準的とされるものとは別の態度を示している．キリスト教の受容がなくとも現金経済への適応が円滑になされたかどうかはわからないが，少なくともキリスト教受容が市場経済や国家への接合を促す潤滑剤のような役割を果たしたのであろう．

最後にもう1点指摘すべきことは，第4章にみたように，現金経済が浸透しても従来の隣人関係に認められた互恵的関係は存続しているということであり，いわば現金経済と互恵的な贈与経済が混在していることである．言うまでもなく，互恵的な関係は先進国の人間関係にもみられるもので，二者間の距離に応じて，文化的に共有されたルールのなかで現金経済による関係との使い分けがなされている．かつては互恵的な交換で大半が占められていたマジャンギルの社会において，現金経済が急速にすすむ状況のなかで現金経済と贈与経済の「落ち着きどころ」が模索されているといってよい状況であろう．現金を介した関係がどこまで広がってどこに落ち着くのかは，もう少し判断に時間を要する問題である．

〈謝辞〉

本稿で提示された主要なデータは，文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）『森林移動農耕民のライフコースと環境知識・環境利用技術の獲得プロセス』（研究代表者・佐藤廉也）および基盤研究（A）『熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究』（研究代表者・池谷和信国立民族学博物館教授）によって得られたものである．記して感謝する．18年もの間，著者のたびたびの訪問を快く受けいれてくれたA氏をはじめとするクミ村の村人に対しても，深く感謝する．

〈文献〉

Freeman, D. and Pankhurst, R. (2001) *Living on the edge: Marginalised minorities of craftworkers and hunters in Southern Ethiopia*. Addis Ababa: Addis Ababa University Printing Press.

Henrich, J. et al. (2004) *Foundations of human sociality: Economic experiments and ethnographic evidence from fifteen small-scale societies*. Oxford: Oxford University Press.

Herskovits, M.J. (1926) Cattle complex in East Africa. *American Anthropologist* 28(2): 361-388.

Sato, R. (2002) Evangelical Christianity and ethnic consciousness in Majangir. In James, W. et al. (eds.) *Remapping Ethiopia: Socialism and after*. Oxford: James Currey.

佐藤廉也（2003）「焼畑移動農耕民の集落動態 ―とくに集落放棄の社会的要因をめぐって―」石原潤編『農村空間の研究（上）』大明堂：346-363.

佐藤廉也（2005）「森棲みの戦術 ―20世紀マジャンの歴史にみる変化と持続―」福井勝義編著『社会化される生態資源』京都大学学術出版会：257-292.

Stauder, J. (1971) *The Majangir: Ecology and society of*

a Southwest Ethiopian people. Cambridge UP.

〈註〉

i　A，B二人の前にある金額が提示され，それを二人で分配するゲーム．ゲームのルールは，「A（提案者）はどのように分配するかを決めることができる．ただし，B（応答者）は提案された分配案を受けいれるか拒否するかを決定する権利を持ち，受けいれれば提案通りに二人に分配されるが，Bが拒否した場合には双方の受取額はゼロとなる」というもの．仮に分配する金額が5000円で，AとBがともに標準的な経済学が仮定する「経済人」であるならば，Aの分配案は自らが4999円をとるものが「正解」で，Bは提示された1円という分配額を（拒否した場合の0円より金額が大きいという理由で）受けいれると考えられる．

ii　ここで長老 *gutare* というのは高齢者を意味するのではなく，村の行政や教会活動で中心的な役割を担う壮年のマジャンギル男性をさす．マジャンギルの場合，早い時期にキリスト教の影響を受け，1980年代の定住化に際して指導的な役割を果たした1960年代前後の生まれのマジャンギルたちがこれにあたり，当時から現在にいたるまで長老と呼ばれている．

iii　結婚に際して，夫またはその親族から妻方の親族へ支払われる代価．東アフリカの社会では，ウシをはじめとする家畜によって支払われることが多いが，伝統的に大型の家畜をもたないマジャンギルの社会では，斧や銃，それに相当する現金で支払われてきた．

iv　2009年の調査でヤギを所有する世帯が少なくとも2世帯いることがわかったが，村の辺境に住むため世帯を訪問することができなかった．したがって本稿ではヤギ飼養については触れていない．

v　GPSはHolux社製のデータロガーm-241を用いた．2009年8月26日から29日にかけて，延べウシ5頭，ヒツジ1頭に装着し朝7時から夕方6時までの移動軌跡を記録した．ウシ5頭のうち1頭は高地系移民のウシに装着した．

vi　この実験は，最終提案ゲームの準備として試験的におこなったものである．始めに数十人の村人に別個に面接し，「提案者だった場合には，どのような分配案を提示するか．また応答者だった場合には，自らの受取額がいくらまでなら受け入れるか」を質問し，その理由についてフリーディスカッションをおこなった．さらに後日，20歳代から70歳代までのマジャンギルを30名選定し，それぞれ20ブルを提供して実際にゲームをおこなってもらった．

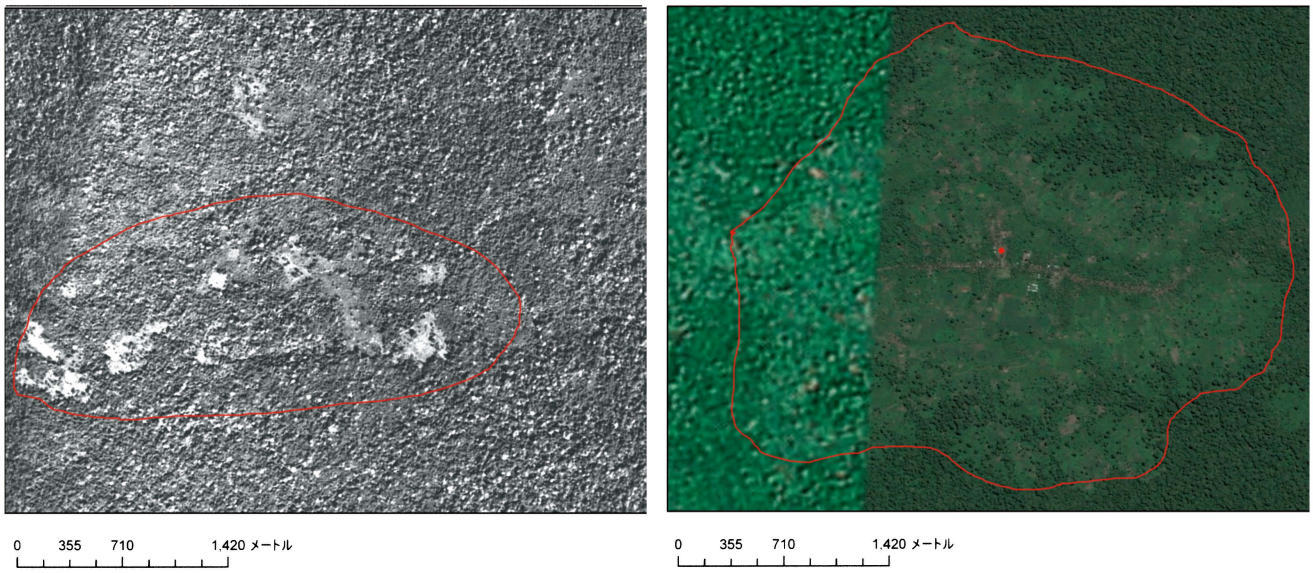

図２　1967年（左）と2007年（右）の調査地域（現在のクミ村と周辺域）

赤のラインは各時期の集落範囲を大まかに示す．いずれも周囲は森林に囲まれている．右図の中央付近の赤いドットはクミ村定期市の開催場所．東西および南北の主要道路の交差点に位置する．

出典：1967年の写真は Ethiopian Mapping Authority 所有の航空写真、2007年の写真は google earth による．

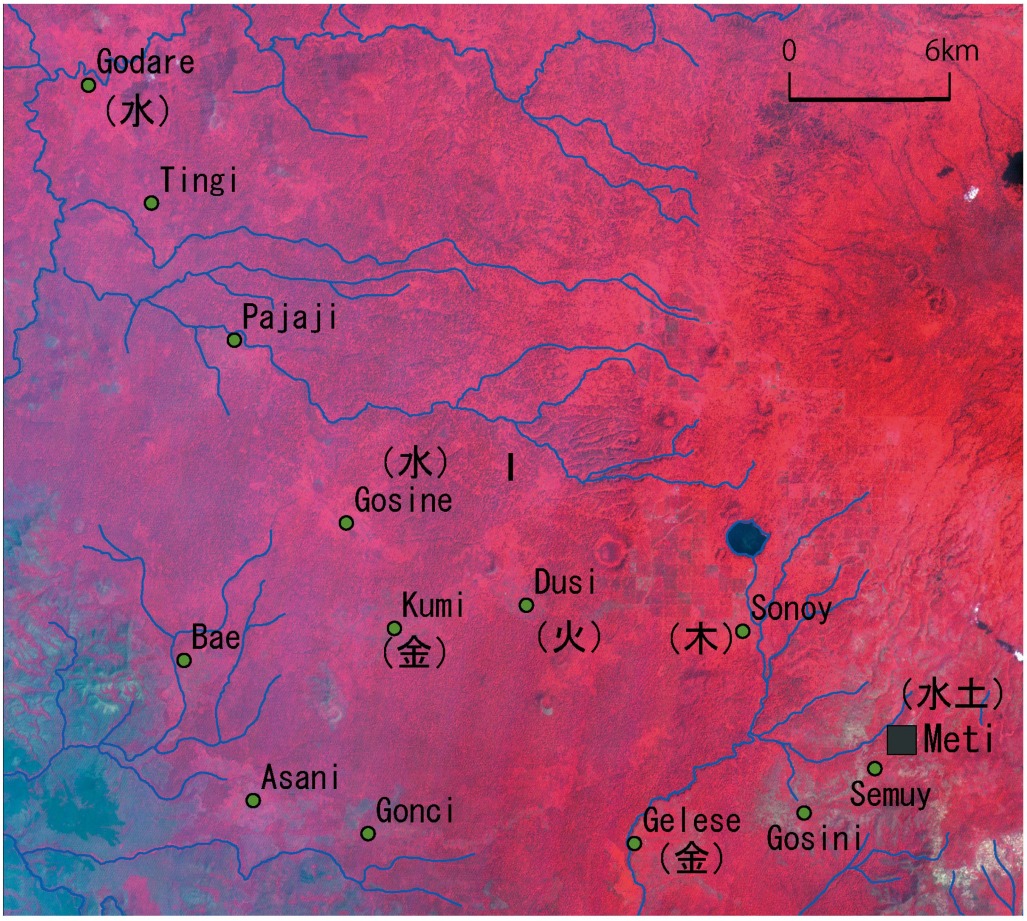

図３　マジャンギルの定住村の分布と定期市の開催日

漢字は定期市の開催曜日を示す．

出典：1999年の SPOT 衛星データを原図として筆者作成

a

b

c

図 4　マジャンギルと高地系移民のウシ放牧ルート

a と b はマジャンギルのウシ，c は高地系移民の 1 日の移動軌跡を示す．

出典：google earth を原図として筆者作成．

a

b

図 5　ウシとヒツジの放牧ルート

同一の男性が所有するウシ（a）とヒツジ（b）の 1 日の移動軌跡を示す．

出典：google earth を原図として筆者作成．

Abstract

The purpose of this study is to examine how human economic behaviors change when cash economy rapidly penetrates into subsistence economy, by describing a process of adaptation to cash economy among the Majangir, who inhabit in Southwestern forest of Ethiopia and have experienced rapid economic change in recent years. The Majangir, who had been traditionally engaged in subsistence shifting cultivation, hunting and collecting of various forest products including honey and wild coffee, has come under the control of the Ethiopian central government and become to live in sedentary villages since the end of 1970s. Periodic markets, which were set up in sedentary villages of the Majangir in the end of the last century, accelerated penetration of cash economy into the Majang village lives and some of them began to keep livestock such as cattle and sheep. A number of younger adult females became to buy earthenware in markets instead of making for themselves, while some females became to make more earthenware for selling in markets. The extent of adaptation to cash economy seems to differ in generations. It may be because the acceptance of Christianity enabled younger generation to adopt cash economy smoothly.

Key words: cash economy, subsistence economy, livestock, earthenware, sedentarization, Ethiopia